sacrolumbar hypoplasia 1例

4) 生下時の異常について

早　産	2例
未熟児	1例
仮　死	1例

なお妊娠前期において母親が Progesterone 製剤を服用した例はなし。

5) 家族歴

家族歴ではイトコ同志の結婚が1組のみであった。また2卵生双生児の一方が尿道下裂で，一方は正常例が一例であった。

小児の尿路奇形に関する研究

京都大学解剖　星　野　一　正

昭和53年度の報告

京都大学医学部附属先天異常標本解析センター（施設長：星野一正）に保存してあるホルマリン固定の胎児1,011例について尿道下裂の有無を肉眼的に観察した(小松洋輔分担)。男子胎児は522例で，その中18例が奇形児であった。後者の中，下肢奇形，臍ヘルニアのある1例に短小尿道と共に尿道下裂を認めた。観察成績は表1に示す通りである。

表 1　胎児における尿道下裂の観察成績

Normal Group				
CRL	males	females	hypospadias	total
101～150mm	146	132	0	278
150～200mm	241	219	0	460
201～250mm	93	95	0	188
250mm～	24	26	0	50
Abnormal Group				
	18*	17	1*	35
Total	522	489	1	1,011

昭和54年度の研究方針

経胎盤ホルモン投与による尿路奇形誘発に関する基礎的観察を実験動物を用いて行う。昭和54年度にはまずマウスを用い，非ステロイド系（non-steroidal）のディエチルスチルベストロール（diethylstilbestrol）とステロイド系のエチニールエストラダイオール（ethynilestradiol）を妊娠マウスに投与し，出生後3週間の仔について肉眼的に尿路奇形を観察し，次いで成熟後の10週令において殺し剖検観察の上，組織学的検索を行って尿路奇形を腎臓より外尿道口に至る全過程において詳細に研究する。

ホルモン投与時期を，妊娠0日（膣栓を認めた日）から9日，12日，15日の3時期にして，催奇形性の臨界期の見当をつけ，次いで臨界期と思われる時期の前後の期間について詳細に催奇性を研究する。腎臓の発生を含む全尿路の発生過程の相違に基づく臨界期とホルモンの催奇量の差異との関係を追究し，ホルモンによる尿路の催奇形機序の解明に資するのが目的である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

昭和 53 年度の報告

京都大学医学部附属先天異常標本解析センター(施設長:星野一正)に保存してあるホルマリン固定の胎児 1,011 例について尿道下裂の有無を肉眼的に観察した(小松洋輔分担)。男子胎児は 522 例で,その中 18 例が奇形児であった。後者の中,下肢奇形,臍ヘルニアのある 1 例に短小尿道と共に尿道下裂を認めた。観察成績は表 1 に示す通りである。